

プロティノスにおける体験と哲学のリアリティー

岡野 利津子 学習院西田幾多郎博士記念館*

Reality of Experience and philosophy in Plotinus

OKANO Ritsuko

はじめに

絶対者が人間の思考で捉えられないものであるかぎり、絶対者を感じ得するには思考の働きを減する必要があると言えるだろう。しかし、プラトン主義哲学が説く方法論においては知性が不可欠であり、思考を減すと言っても、知性の先に知性を超えてゆくという道が採られる。それは、まず不確かな思いなしを捨て、真なる思考に至り、次にそれを捨てて知性を超脱することにより絶対者に至るという道である。

周知のとおり、哲学的な探究方法の中には身体的な行は含まれない。そこで、哲学は文献学的な研究とそれに基づく推論により答えを導き出すばかりで、経験と実感に基づく理解や、人生における態度とは無縁のものだというように誤解されることがあまりにも多い。とりわけ古典研究の分野においては専門家たちの間でさえ、哲学者の言葉にそうした期待や関心が向けられることが少なく、プラトンの言う「アイデア」が「真実在」だと思われることもない。本稿では、プラトンの哲学を継承、発展させて新プラトン主義を確立したプロティノス（205-270年）を取り上げ、彼が到達した絶対者との

神秘的「合一」とそのための哲学的方法のリアリティーに可能なかぎり肉迫してみたい。

1. 感性界から知性界へ

(1) 浄化

プロティノスの哲学体系は、一者（プラトンの「善のアイデア」にあたる）を始原として知性（ヌース）、魂、身体、質料という階層を成している。我々人間の魂は、知性界に留まる全一的な魂の下位部分として感性界の肉体に結び付いている¹。

プロティノスにおける一者との神秘的合一にはその前段階がある。それは「知性界の形相（エイドス）」（プラトンにおける「アイデア」にあたる）としての真実在を観照し、それについて考察する生活であり、それにはまず魂の「浄化（カタルシス）」が必要だとされる²。魂の「浄化」とは、醜さ、つまり悪徳（放埒、不正、欲望、動揺、臆病ゆえの恐れ、卑小さゆえの嫉妬など；cf. I6[1]5.25-29）から魂を浄めることである（cf. I6[1]5-6; I2[19]3-5; プラトン『パイドン』69a6-d7）。「悪徳ゆえに眼のかすんだ不浄な者や、臆病ゆえに素晴らしく輝かしいものを見ることのできない弱々しい者」（I6[1]9.26-27）は、知性界の美を観ることはできない。というのは、欲や恐れといった諸情念は人の目を

* hrokano@yahoo.co.jp
学習院西田幾多郎博士記念館
〒248-0024 神奈川県鎌倉市稲村が崎3丁目11-1

曇らせ、真実を捉えることをできなくさせるからである。悪徳からの魂の「浄化」は、感性界から知性界への魂の「向け変え（エピストロペー）」でもある（I 2[19]4.17, I 6[1]7.4-7, V 1[10]1.11-25）。

（2）問答法

そして、プラトニズムでとりわけ重視されるのが「問答法（ディアレクティケー）」である。プラトンは次のように述べている。

「問答法的な探究方法のみが […] 実際に魂の眼が異国の（つまり自分の本性に無縁の）泥の中（感性界）に埋もれているのを、穏やかに引き起こし、上方へと導いていく」（プラトン『国家』VII, 533c7-d3）。

「人が問答することによって、感覚は一切用いることなく、言論だけを通じて、それぞれの事物がまさにそれであるところのものそれ自体（アイデア）を目掛けて突き進もうとするとき、そしてまさに善であるところのものそれ自体（善のアイデア）を、知性の働きそのものによって捉えるまで退くことがないならば、人は知性的なもののまさに究極（善のアイデア）に至るのである」（*ibid.* VII, 532a5-b2）。

プロティノスにおいても、問答法が「哲学の貴重な部分」（I3[20]5.8）である。プロティノスによれば、問答法は真に存在するものと、そうでないものについて、それぞれの違いや共通性、位置づけなどを「言葉で言うことのできる能力」（I3[20]4.2-6）であり、「感性的なものを巡って彷徨うのをやめ、直知される世界の中に腰を据え、そこで虚偽を取り除き、プラトンの言う〈真理の野〉（プラトン『パイドロス』248b6）で魂を養いながら、すべき事を為す」

（I3[20]4.9-12）ものである。問答法はまた、善とそれに属するものや善ならざるものとそれに属するもの、また永遠なるものとそうでないもの等についても吟味する（I3[20]4.6-9）。

「我々を教え導くのは、アナロジーと除去（否定）と、かのもの（一者）から生じたものたちの認識と、いくつかの段階であり、我々をかのものへと連れていくのは、浄化と徳と、身を美しく整えることと、直知される世界への登攀と、そこに腰を据えることと、かのところ（知性界）のものを味わうことである。そして、自己が自己自身とその他のものたちの観照者であると同時に観照の対象でもあるものとなり（つまり、自己自身が観照対象そのものとなりという仕方で観照し）、自己自身が真実在となり、知性となり（つまり知性と合一し）、完全無欠の生きものとなり、もはや外からではなしに（自己の内に）それ（一者）を眺める人は——このようなものとなった人は、（一者の）すぐ近くにきており、その次の段階がかのもの（一者）である。かものは直知される世界全体の上で輝きながら、すでに間近にある。そこで人は、すべての学びを放り出す——あるところまでは（学びによって）教え導かれ、美しきものの中（知性界）に腰を据えて、その内にある間は直知しているのだが——まさに知性そのもののいわば波（のうねり）によって連れ出されて、いわば膨れ上がるそれ（波）によって高く持ち上げられて、いかにしてかは分からないままに、忽然と（一者）を見てとるのである」（VII7[38]36.6-19）。

2. 哲学的方法における自己放下

悪徳からの浄化や真ならざるものの「除去」、そして知性の働きといった事が、なぜ神秘的合一の体験につながるのか、分かりにくいかもしれない。人間は、こうであって欲しいという思いがあると、自分に都合よく、ものを歪めて見てしまう。哲学的な方法とは、欲や感情などによって惑わされることのない曇りのない知性の眼で事物の真相を観るというものである。ちょうど一般に学者がある事実に直面して、それに矛盾する仮説や従来の学説を捨てるように、根源的原理を求める哲学者は、「それではない」と考えられるもの、つまり「これは違う」という結論になるものを捨てて行く³。万有の根源を求める思索はまず、実在度の高いものと低いものとを吟味し、実在度の低いものを除去していく。そのようにして感性界の不確かな思いなしを離れて、知性界の実在についての真なる思考に至る。そして、知性界の諸形相の細部に思念を凝らすことにより、意識の焦点が定まってきた、いよいよ知性界の奥深くへと入り込んでいく。それは分からないものについて「推論する」という知性活動ではなく、「観たもの」について精察するという知性活動である。とりわけ「問答」を通じて他者から思わぬ示唆や問いかけがあると、知性界の細部や全体との関連などに、更に深く意識が集中するようになる。プロティノスが「知性界に腰を据える」と言っているのは、知性のこうした活動に没頭することである。

しかし、そのようにして観照される知性界の真実在にもそれぞれ固有の形相（つまり特定の内容）があり、そこには複数性がある。万有の始原はそのような複数性をもつものではないので、始原を探究する者はそれらをも捨てて、その先に進まなくてはならなくなる。つまり、感

性界から一者へと向かう順序としては、まず「感性界とは異なる知性界のようなものがあるのではないか」という漠然とした思いから始まり、その探究に向かうために欲や感情を離れ、知性界の意識に目覚め、真実在を直知し、最後にそこで獲得された世界観をも捨てていくことになる。とりわけ最終段階は、探求者が苦勞の末に掴んだ真実在すら取って手放すということである。だが、そのようにして完全な自己放下が起こるのである。

「除去」というこの方法は、ソクラテス以来の伝統だとも言えるだろう。〈無知の知〉を主張し、徳についての対話で答えを出さなかったソクラテスが、史上稀に見る正義の人であり得たのは、彼が少なくとも「不正だ」と思われる事を一切為さなかったからである⁴。その際、彼はしばしば命そのものの危険に直面したし⁵、周知のとおり最後には命を落とした。哲学者が「これは違う」と思われるものを放棄するのは、代わりに何か好ましいものを得るための方法ではなく、単に間違えないようにするためである。他に思惑や期待があるわけではない。たとえそれに代わるものが得られず、すべてを失うことになるとしても、違うものは違うのだから、捨てることにするというのが哲学の道である。

プロティノスの一者の探究にかぎらず、哲学のこうした方法は思考上でのみ行われるものではなく、ときに人生全体にかかわる大きな覚悟と徹底性をもつて遂行される。一般に、自分にとって意味のあるものを何か一つ捨てるだけでも、大きな心の変化が生じ、見える景色が全く変わるということはいくらでもあるだろう。そして、何に取り組むのであっても、「死んでも良い」「たとえ地獄でも良い」という強い気持ちがあれば、個我の限界を突破することも起こり得るものなのではないだろうか。

3. 一者との合一

プロティノスによれば、一者はいかなる規定も形もたず、知性的な形相すらもたず、まったく無限定であり、無限であり、「存在」と言えるものですらない。「かのものの把握は、知識によるのではなく、また他の直知対象のように、直知作用によるのでもない。それは臨在という知識に優る仕方によるのである」(VI9[9]4.1-3)。一者の把握は「受容」(VI9[9]4.25)や「適合」(ibid.26)、「類似」(ibid.27, VI7[38]34.11)、「触覚のようなものや接触」(ibid.27, cf. ibid.7.4, V3[49]17.25, 26, 34)によるとも言われる。一者の会得に必要なことは、「我々が(肉体に)降下して身に着けたものを脱ぎ捨てて」(I6[1]7.5)、「一者からやって来たときと同じ状態」(VI9[9]4.27-28)になることである。

我々の魂が一者のもとにまで戻るには、単に肉体的な情念や欲望だけでなく、知識や、知性界の直知対象(形相)すらも手放すのでなければならぬ(VI7[38]34.3-4, VI9[9]7.14, 20, V5[32]6.20-21)。そのようにして「一切を除き去り」(V3[49]17.39)、一者と似たものとなって一者を受け入れる用意(VI9[9]4.26, VI7[38]34.10-12)をし、「自己のみの者となって自己のみの者へ」(VI9[9]11.51, cf. I6[1]7.9, V1[10]6.11, VI7[38]34.7-8)⁶向かうとき、我々は「一者の観照において我を忘れて一者と一体となる」(VI9[9]7.20-21)⁷。

一者との合一において、我々は一者を対象として見ることなく(VI9[9]11.6)、自己自身が一者となって(ibid. 9.58)一者を見る⁸。そこには見る主体と見られる客体といった区別はない(ibid. 10.12-15)。そうした意味では、「見る」という表現も不適切である(ibid. 10.11-12, 14, cf. ibid. 11.22-23)。そのとき我々の魂は一者と

自己とを区別することができず(VI7[38]34.14, VI9[9]20-21)、「両者は一つ」(VI7[38]34.13-14; cf. VI9[9]3.12, 4.24, 9.33, 10.16, 21, 11.5-6)である。それは「単一化」(VI9[9]11.23, cf. ibid.10.11)だが、自己が自己のあらゆる形(つまり具体的に限定された自己の内容)を投げ捨てるという点では、「自己放下」(VI9[9]11.23)であり「脱我(エクスタシス)」(ibid.)である。とはいえ、この自己放下によって見出されるものこそ、真の自己と言えるものである⁹。我々は、「自己自身の内へと振り返ることによって、一者へと振り返る」(VI9[9]2.35-36; cf. ibid. 7.17; V1[10]12.14-15)。プロティノス自身の美しい比喩的表現によれば、「我々は自己自身の中心点において、いわば万有の中心点のごときもの(つまり一者)に接合する」(VI9[9]8.19-20; cf. ibid. 10.17)。

一者との合一体験は、一者の内へのみ留まるという意味で、静的な体験である¹⁰。それは、「全く静止し、いわば静止になり切る」(VI9[9]11.15, cf. ibid.24)ことであり、そのときには感情や欲求だけでなく、「言論も、何らかの知る働きもない」(VI9[9]11.12)¹¹。我々は一者に向かい、「もはや何ものをも一者に付加してはならないし、ほんの僅かでもそれから離れ、前へ進んで二者になるのを恐れて、完全に静止しなければならない」(V5[32]4.8-10)。我々はそのとき、「自己自身についてさえ思いを巡らすことなく」(ibid.11.14-15)、また「自己が何者となって見ているかさえ考える余裕をもたない」(VI7[38]34.20-21)。その間、我々は「至福の状態」(VI7[38]34.38; 35.26; cf. ibid. 34.30; プラトン『パイドロス』247d4)を味わうばかりである。

4. 一者体験の言語化

一者との合一体験の最中は、一切の反省的な

思惟は止んでおり、体験者はその状態について語ることもなければ、考えて理解することもない。一者自体は知性を超え、言語を絶しているが、一者と合一した者は、その体験を後から振り返って一者について考え、一者について語る（V3[49]17.26-28）。「（一者に触れた人は）触れているときには何も言うことはできないし、その暇もないが、後になって、それ（一者）について考えてみることはできる」（V3[49]17.26-28）。「我々はいわば（一者の）外側を走り回り、我々自身の体験を解釈（翻訳）しようとしているのである」（VI9[9]3.52-53）。

逆に、一者と合一している者が一者について振り返り、これを語ろうとすると、一者との合一状態を離れてしまうことになる（VI9[9]10.17-21）。一者と合一している者が、少しでもその状態について考え始めるなら、それは知性の直知や魂の論理的思考の領域に降りてきているということである。体験者は一者と一つになっている自己の状態を振り返って見ることにより、一者の内容をまず直知することになる（cf. V5[32]10.10-14）。直知とは一挙に全体を直覚的に捉える働きだが、その次の段階で、魂に固有の思考作用が働き、直知された内容が論理的に理解され、順を追って逐次的に説明されてゆく¹²。こうして、一者自身はあらゆる認識を超えたものだが、それにもかかわらず、体験者が合一体験の後で一者を振り返って見ることにより、一者がいかなるものであるかを直知し、更に論理的に体系づけて考えることが可能となる¹³。というのも、一者そのものは全く無規定で、一切の認識を超えたものだとしても、他の諸存在にとって一者がいかなるものであるか（つまり、それが万有の始原である、等）を体験者は直知することができるし、探究の過程で見てきた諸存在の階梯を、体験的に知った根源的原理との関係で再構築することもできるからである。

そして最後の段階で、自己が理解した事についての発話や記述が行われる。これは既に感性界において身体的に行われる活動である。こうして一者との合一の状態から、身体まで意識が降りてくる過程で、反省的意識（一者との合一状態を振り返って見るという意識活動）により、一者体験は言語化される¹⁴。これは、言語を超えたものを言語に翻訳するということである。このようにして、一者を万有の始原とする哲学体系が構築され、諸々の概念が言語的に定義される。

5. 直知とロゴス（言論的表現、形成原理）

「直知」というものがいかなるものであるか、そしてどのようにしてその内容が論理的、言語的に展開されるかについて、より具体的な理解が可能となるように、ここで補足的な考察を行っておきたい。

（1）プロティノスの執筆スタイル

弟子のボルピュリオスによると、プロティノスは目が悪かったため、書いたものを見直すことがなく、内容に意識を集中していたため、文字の執筆は無造作だったらしい。頭の中で思考し終わってから、一気に書き上げるという仕方ではプロティノスは執筆を行ったという。「彼（プロティノス）は考察を始めから終わりまで自分の中で仕上げた状態で、次に考察したことを文字に委ねていくというようにして、魂の中で整理したものを書き続けていったのであって、それは別の書物から文字を書き写しているかと思われるような仕方であった」（『プロティノス伝』8.8-11）。来客などがあって執筆が中断されることがあっても、その後、何事もなかったように執筆の続きに戻っていったらしい（ibid. 11-19）。詳しくは後述するが、発言された「ロゴス」（言葉）は魂の中の「ロゴス」（思

想)の模倣だ¹⁵というプロティノスの考えは (I 2[19]3.27-30; cf. V1[10]3.7-9; IV3[27]30.7-10; III8[30]6.22)、彼自身のそうした経験に基づいた実感であろう。

(2) 知性の「直知」とはいかなるものか

①「分かる」という意識現象

直知(ノエシス)というのは、プロティノスにおいては基本的には知性(ヌース)の働きであり、単に「考える」ということではない。たとえばそれは一者との合一体験の後、最初に生じる知的直観である。我々の日常的な意識現象の中で、直知に最も近いのは「分かる」という意識の働きであろう。「分かる」ということは瞬時に起こる。複雑な内容をもつことであっても、一瞬の内にその全体が把握され、理解される。

②「分かった事」についての説明(ロゴス)

単純な事であれ複雑な事であれ、分かった瞬間は「そうか!」という言葉が出てくるくらいだろう。しかし、理解された内容は次に自ずと分節化されて逐次的に説明されていくことになる。説明とは、論理的な展開である。一般に、直観の内容が反省的に捉え直され、論理的に展開されることによって一つの“theory”となる場合がある。そのように知的な内容をもつ直観が、プラトン主義における「テオリア(観照)」に当たるとも言えるだろう。プロティノスにおいては、この種の直観は主に魂が知性(ヌース)の内容(諸形相)を観たときの直観的な働きであり、「テオリア」とも、「直知」とも言われる。だが、魂が直知した知性の内容は、次に、魂固有の働きである推論的な思考(ロギスモスやディアノイア)を通じて逐次的に展開される。つまり、瞬時に直観的に理解された内容が、自己展開するようにして論理的な説明となり、分節化され、言語化(発話、あるいは文章化)されるということである。

プロティノスはこれを「ロゴス」という表現で説明している。ギリシア語の「ロゴス」には、「言葉」、「説明」、「考え」、「理性」、「理」、「原理」といった意味がある。声に出された言葉や書かれた言葉としての「ロゴス」は、思想内容が説明されたものである。「ロゴス」にはまた、プロティノス独自の意味として「言論的表現」やそれを生み出す「形成原理」というものがある。たとえば「魂は知性のロゴスである」(e.g. V1[10]6.44-45)と言われる場合の「ロゴス」は「言論的表現」という意味であり、知性の「ロゴス」(言論的表現)としての魂は、知性の「模倣」(I2[19]3.28)であり、「影像」である(V1[10]6.46)とされる。その一方で、たとえば「形相はロゴスである」(e.g. I 6[1]3.18; II 6[17]2.15; II 7[37]3.12; cf. Sleeman-Pollet, cols. 603-612)と言われる場合の「ロゴス」は、「形成原理」を意味している。つまり、知性界の形相は、感性界の存在を作り出す原理だという意味である。プロティノスの「ロゴス」のこうした用法で説明するなら、何かが分かった瞬間の直観的な理解が自ずと論理的な説明へと分節化されて言語化されるのは、そこに「形成原理」(ロゴス)が働いているからであり、そのようにして言語化されたものは、直観的に理解された事の「言論的表現」(ロゴス)だと言えよう。

③内容の大きさの違い

我々の生活の中でしばしば生じる「分かった」という体験と知的直観との異なりは、単に内容の大きさの違いでしかないと考えられる。たとえば西田幾多郎も『善の研究』第一編、第四章「知的直観」の中で、次のように述べている。思惟の根柢にも知的直観が横たわっている。思惟は一種の体系であり、体系の根柢には統一の直覚がなければならぬ。プラトン、スピノザの哲学のような偉大な思想の背後には大なる直覚が働いている。こうした知的直観も、

普通の思惟も、ただ量において異なるのであって、質において異なるのではない。前者は新たな、より深遠な統一の直覚だというにすぎない(一・33-37)。

比較的内容の少ない事が分かったときは、すぐさま言語化されて説明される。あるいは言語化しながら、自分に一瞬生じた直覚の内容を明確にしようとすることもあるだろう。そして我々はその間中、自分が直覚的に掴んだ内容が有耶無耶にならないよう意識を集中し、なるべく正確に矛盾なく、それを表現しようと試みる。このような場合、直覚的な理解が瞬時に反省的思惟に転じるため、直覚の内容には意識が向けられても、直覚の体験自体が意識に上ることは殆どない。しかし、内容が大きくなればなるほど、体験自体が劇的で圧倒的なものとなり、分かったことについての驚嘆や感動、歓喜などが生じる。また、直覚された内容の全体を一通り、順を追って説明していくのに長い時間や日数を要するようになる。こうした内容の大きさの違いが、日常生活の中で頻繁に起こる「理解」と比較的稀にしか起こらない知的直観としての「直知」の違いだと言えるだろう。

6. 一者からの分化・展開としての万有

それでは一者と合一したプロティノスは、一者からの万有の生成をどのように説明しているだろうか。プロティノスによればまず、一者から「自己自身を振り返って見る」という反省的な働きが発したものの、つまり一者の外的・派生的な活動¹⁶が知性である。

「一者はいかにして知性を生み出すのか。それは、一者が自己自身に向かって振り返って見たからである。そして、この視覚が知性である」(V1[10]7.5-6)¹⁷。

一者を振り返って対象化して見る活動の主体は、もはや一者自身ではなく、知性である。このようにして、一者から知性が生じる。つまり、一者が「自己自身を振り返って見る」ことにより、見る自己(主体)と見られる自己(客体)とに分化したものが、知性である。知性とは、一者が自己を対象化するという一者の反省的な自己意識だと言える。そのときに直知されている具体的な内容のそれぞれが、知性界のアイデアたる諸形相だということになるが、これは一者が対象化されて見られたときの一者自身の様々な「印象」である¹⁸。

そして、知性に続く存在である魂も、知性を見る「視力」のようなものとして知性から生じたとされている¹⁹。魂としてのこの「視力」は知性から発し、知性を振り返って見るという反省的なものであるから、知性がその外的・派生的活動²⁰において、自己自身を振り返って見る視力だという捉え方もできる(これに対して、一者を見ている知性の活動は知性の内的・実体的活動である)。プロティノスの宇宙生成論では、上位の原理がその外的・派生的活動において自己自身を振り返って見るという反省的な意識により、下位の存在が生じる(III8[30]4.5-14; IV8[6]3.25-27; V3[49]7.20-21; V1[10]7.5-6; cf. 岡野2008, pp. 115-117)。知性の反省的な自己意識が魂であり、魂は知性の外的・派生的活動であるが、魂が知性を見ることによって得た内容は、知性の内容が更に多様化し、分化したものである。そして、プロティノスはその分化の仕方を、発言された言葉における思想内容の分節化に擬えられて説明している。

「ちょうど声に出されたロゴス(言葉)が魂の内にあるロゴス(思想)の模倣であるように、魂の中のロゴスも、別のもの(知性)の中のロゴス(直知内容)の模倣である。従って、口外されたロゴスが魂の中の

ロゴスに比べて部分に分けられているように、かのも（知性の中のロゴス）の翻訳である魂の内のロゴスも、自分の先にあるものに比べて部分に分けられている（分節化されている）」（Ⅰ2[19]3.27-30）。

プロティノスはまた、知性の中で「すべてが一緒」（アナクサゴラス『断片』B1を参照）にあったものが感性的な領域で分離していく様子を、「種子」の中で一体となっていたものが成長過程で分化してゆく様子に譬えている。

「かしこ（知性界）ではすべてが一体であるが、ここ（感性界）では（知性界の形相を原型としたその）映像が分割されて、それぞれ別のものとなっている。それは、ちょうど（生物の）種子の中では『すべてが一緒』で、それぞれがすべてであって、手と頭とは別々になっていないが、ここ（身体）ではそれらが互いに分離しているのと同様である。何故なら、それら（手や頭）は（知性界の形相の）映像であって、真なるものではないからである」（Ⅱ6[17]1.8-12）。

「（魂の場合と）同様に、しかもはるかに一層、知性は『すべてが一緒』になっているが、また、それぞれが固有の力であるので、（その意味では）『すべてが一緒』ではない。全体としての知性は、ちょうど類が種を包むように、また全体が部分を包むように、（すべてを）包んでいる。そして、（生物の）種子の力もまた、今言われていることについての比喩を提供する。即ち、種子全体の中では、すべてが未分の状態になっており、諸々のロゴス（つまり種子における諸原理）は恰も一つの中心点の内にあるかの如くである。それにもかかわら

ず、そのあるものは目のロゴス（原理）であり、別のものは手のロゴス（原理）であって、それぞれが異なっていることは、種子から生じた感覚物において知られるのである」（Ⅴ9[5]6.7-15）。

このような意味でのストア的な「種子的ロゴス」（SVF. Ⅱ580, 1027）という表現を、プロティノスは好んでしばしば用いている（Ⅲ1[3]7.4, Ⅳ4[28]39.6, 8-9, Ⅴ95[9.10）。「種子」の中では目や手を作り出す原理が一体となっているが、出来上がった身体においてそれぞれが目や手として分化する。同様に、知性の内ではすべての諸形相が一体となって非物質的な知性界を構成しているが、感性界において物質的な高の中に映し出されると、それぞれが別の場所に生じ、互いに分化したものとして展開される。

同様に、魂（宇宙靈魂）が知性の永遠性（永続性ではなく、むしろ無時間性と言うべきもの）の代わりに時間を作り出す仕方も、「種子」の比喩で説明されている。

「じっとしている種子から原理（ロゴス）が自己を展開し、多と思われるものへと進み、その多を分割することによって消失させ、自己の内の一つとなっている代わりに、その一つのを自己の外で費やししながら、より脆弱な長さ（空間的な延長）へと進出するように、まさに同様な仕方で、魂（宇宙靈魂）もかの世界を模倣して感性界——その世界はかしこの動き（直知活動）ではなく、かしこの動きに似ている、その似姿であろうと欲する動きをするのであるが——をつくる際、永遠の代わりに時間をつくり出して、まず魂自身を時間化した」（Ⅲ7[45]11.23-30）。

つまり、「種子」という未分化のものからの

空間的展開と同様に、知性の直知において非延長的であった「永遠」が、展開されて延長的になったものが「時間」である²¹。

こうして、一者の外的活動における反省的な自己意識により一者が主客へと展開したものが知性であり、知性の外的活動における反省的な自己意識により知性の内容が更に分節化したものが魂である。また、魂（宇宙靈魂）の外的活動としての反省的な自己意識において知性界で無時間的・無空間的に常に同時に全体であったものが時間的・空間的に延長性のあるものとして分節化し展開したものが感性界である²²。現在の我々の意識も、一者の自己意識の展開として生じていることになる。それ故、我々は「自己自身の内へと振り返ることによって、一者へと振り返る」ことができるのである（cf. 岡野 2020, pp. 210-211）。

7. 意識の展開としての宇宙生成論

「種子」といった物質的な比喩で説明される万有の展開を、我々は自己の外の対象として思い描きがちであるが、そうした仕方では解釈すると、空想的な宇宙生成論になってしまう。それは、本来非物質的なものを、物質的に思い描くからである。知性界についてプロティノスが語っているのは、我々の意識の外に独立して存在する物質的な対象界のことではなく、我々の意識界そのもののことである。物質的な比喩をそのままにイメージして脳裏に思い浮かべしまうと、我々自身の意識の内奥に知性界の諸原理を実感することができなくなる。だが求められているのは魂の探究であり、それは自己の内知性界の諸原理を見出すことなのである。

一者からの万有の宇宙論的展開は、一者との合一を経験しているプロティノス自身の意識の展開と一致している。一者との「合一」とは一者の内なる活動としてのある種の自己直観²³の

内に留まることであるが、一者について何かを知ったときには、その意識の働きも、知られた内容も知性という第二の原理に属するものとなっている。たとえば「これこそ万有の始原なのだ！」とか「これがすべてのものにとっての真の目的である！」と直観した瞬間に、その意識状態はもはや一者との合一状態ではなく、知性界の直知活動となっている。プロティノスは、一者と合一することにより一者を体験し、その状態を振り返って直知することにより知性の次元へと降下し、知性の直知内容を振り返って論理的に把握し直すこと（つまり魂固有の働き）により魂の次元へ降下し、更にその内容を振り返って身体的レベルで言語化している。だがこの過程は、一者から知性が生じ、魂が生じ、感性界が生じるという宇宙生成論（いわゆる「発出論」²⁴）そのものの過程でもある。

プロティノスの発出論は、単なる思弁によるものではないし、ビジョンのようにして対象的に見られたものでもない。それは、プロティノス自身の意識状態そのものの記述である。つまり、プロティノスの哲学体系においては、意識の次元がそのまま実在の次元であり、意識の展開がそのまま実在の展開である。一者から発する一者の外的活動（一者が自己自身を振り返って見る活動）に即して、プロティノスは一者について直知し、知性の外的活動（知性が自己の内容を魂の次元において展開する活動）に即してそれを論理的に表現し、更に魂の外的活動（魂が自己の内容を感性界において展開する活動）に即して身体的レベルで言語化したのである。一者、知性、魂は我々の自己の内なる根源であると同時に、宇宙的原理でもあるので、我々が自己の根源（一者、知性、魂）へと帰することによって生じる働きは、これらの宇宙的原理そのものが自己を展開する働きでもある。そこで、一者と合一した者が、後で一者について認識し語るのは、一者の外的活動における一

者自身の自己認識、自己表現でもあると言える。

一者についての認識は知性の段階においては直観的なものであり、推論的なものではない。たとえば一者が万有の始原であることは、推論的に導き出される答えではなく、直観的に把握されることである。しかし、この直知内容は感性界へと降下する体験者の意識の中で、感性界の諸存在や、体験者自身に具わっている知識に結び付けられ、その因果関係が考慮されることによって、論理的に説明される。原因が先で、結果が後という時間的な関係が、このときはじめて生じる。つまり、このような意識の働きにおいて、前後関係のある世界が生じるのである。また推論的思考自体が順を追って説明するという逐次的な働きであり、時間的推移の中で次々と異なる展開を見るものである。そこでプロティノスによれば、時間というものが存在し得るのは、魂のこうした逐次的な意識活動によってだということになる²⁵。

8. 知性界における「永遠」と「真実在」

こうして魂の逐次的な活動により感性界に時間的・空間的延長が生じるが、それ以前の知性界においてはいかなる延長もなく、すべては同時に一つになっており、その中にすべてが含まれている。そこは時間以前、空間以前の世界である。プロティノスによれば、永遠とは「常に同一性の内に留まっていて、すべてを現在しているものとして持っている生命」(ibid. 3.16-17)である。先にも述べたように、これは時間的な永続性ではなく、むしろ無時間性とも言うべきものである。

我々が一者と合一するときも、知性界において直知するときも、まずその状態に留まる意識があり、その後でそれについての論理的・言語的な説明や、目に見える物質的な広がりをもつ形の制作といった展開が起こる。直知や観照の

内容は、感性界において初めて時間的・空間的延長の中で表現されるが、それ以前はそうした延長性をもたない。一者や知性界の全体を同時に捉えている意識が持続するかぎり、完全に一様でいかなる変化もない状態が続いているばかりであり、このように全く何の変化もない状態においては時間の流れは存在しない。プロティノスの言う一者との合一や、知性との合一は、こうした無時間的な状態に留まる体験である。だが、非延長的な直知や観照の全一的な内容が、魂に具わる逐次的な働きによって捉え直されるとき、時間の流れや空間的な延長をもつものが生じる。この感覚が、感性界に先立って知性界が存在しているとか、時間に先立って永遠が存在しているという認識につながっている。そして、知性的な意識がきわめて明瞭なものであるため (e.g. III8[30]8.17-19)、プラトニストたちにはそこで把握されているものこそが「真実在」だと確信され、それに比べて感性界における感覚対象の方が不確かな「影」のように曖昧なものに見えるのである。

したがって、彼らが知性界の形相(アイデア)を「真実在」だというのは、しばしば誤解されるように、ファンタジックな理念を理想化し、絶対化するからなどではない。知性界の形相は感性界の諸物に先立つ実在であり、感性界の諸物が存在することと認識されることとの原因である²⁶。たとえば作家は、自己の魂の内なる形相(知性界の形相)を観て、その模倣物としての作品を創り出すのだから、形相は感性界に創り出される作品に先立って存在しており、作品を生み出す形成原理(ロゴス)として働いている。だがそれだけでなく、知性界の形相は感性界の存在が認識される原理でもある。たとえば製造者が椅子の形相(アイデア)を観ながら家具を造るから、人が見てすぐ椅子だと分かって腰掛けられる家具ができる。あるいは、たとえば美しい絵画は「美のアイデア」にあずかることに

より美しいものとして存在するが、我々がその絵画を美しいものとして認識するのも「美のアイデア」に照らして判断するからである。そのような意味で、形相（アイデア）はこの世のものがある存在することの原因であるとともに、存在がそのようなものとして認識されることの原因でもある。

まとめ

以上で述べたように、プロティノスの哲学によれば、一者と合一するにはまず我々の意識が知性界に目覚める必要があり、そのためには感性界における欲や感情からの「浄化」が不可欠である。欲や感情が絡むと思考もそれに引き摺られ、自分に都合良く考えようとしてしまい、真実を観ることができなくなるからである。知性界における意識は感性界における意識より確かなものであり、そうした意識によって捉えられている対象こそ真実在である。そして「問答法」によって知性界における意識が深められる。だが、知性界の真実在にも、そこでの直知にも複数性がある。万有の究極的な始原を探究する者は、知性界で得られた真理も自分が探し求めているものではないということに直面せざるを得ない。他に得られるものがなくても、ともかく違うものは斥けるというのが知的な探究である。知性界の真理を手放すことは、探求者における最終的な自己放下となる。こうして感性的な自己も知性的な自己もなくなったとき、探求者の意識は「一者からやって来たときと同じ状態」になる。このとき探求者は自己と一者との区別ができなくなるのであり、これがプロティノスの言う一者との合一である。このようにして探求者は、知性の先に知性を超えていくという方法で絶対者との合一に至る。これはしばしば誤解されがちであるように、知性を働かせて絶対者を推論するというのではなく、絶

対者の探究に身を投じということである。

一者そのものは人間の認識も言語も超えたものであるが、一者を体験した者は他の諸存在にとって一者がいかなるものであるか（つまり、それが万有の究極的な根源である、等）を直知することができるし、それについて論理的に説明することができる。だが、一者について何かを直知したときには、もはや体験者の意識は一者との合一状態から外れて知性の次元に降りてきているし、言語で順序立てて考えたり説明したりしているときには、既に感性界へと降りてきている。

だが体験者は、一者との合一状態から知性の直知活動と魂の推論的思考、および感性界での言語活動へと降りてきながら、一者からの知性、魂、感性界という宇宙論的な万有の生成に立ち会う。というのも、体験者は一者となって一者を体験するからである。体験者が一者との合一状態を振り返って見て直知するとき、一者が一者自身を振り返って見て知性を生み出すという宇宙論的な生成と同じことが起こる。これは、一者自身の外的・派生的活動にあずかり、一者自身の自己展開を体験するというでもある。体験者が更にその内容を論理的、言語的に展開するのは、知性や魂の外的・派生的活動にあずかることであり、知性や魂の自己展開を体験することでもある。一者と合一した者が体験する意識の展開は、一者からの宇宙実在の展開に即したものであり、体験者が一者を振り返って直知し語ることは、一者自身の自己認識であり、いわば一者自身の自己表現である。同様の経験は、必ずしも一者との合一に至らなくても起こり得る。たとえば作家は自らの魂の内に形相（アイデア）を観照することにより、それを表現する作品を創り出すことができる。それは作家自身の自己表現でもあるが、ロゴス（形成原理）としての形相自身の自己表現でもある。

最後に、プロティノス哲学の大きな特徴であ

る一者と知性との峻別と、その意義について指摘しておきたい。プロティノスは一者の自己認識を「知性」として、一者自身とは異なる原理として区別したわけだが、これは絶対者と絶対者についての知とが異なる次元のものであることを意味している。一者そのものは直知も含めたいかなる認識をも超えており、一者について知られることは、一者自身ではなく知性の内容である。具体的な内容をもつ認識は、たとえそれが最終的な真理と言えるものであっても、知性の内容であって、一者そのものの内容ではないということになる。一般に、人間が何等かの神秘体験に至ったとき、そこでそれまでの模索の答えが出るものであり、それは具体的な思想や信念を形成していくものだろう。そのようにして獲得された信念は絶対化されやすいかもしれないが、プロティノスによれば一者についての認識は既に知性の内容であって、一者そのものの内容ではない。根源的原理そのものは無相であり、具体相におけるものはいずれも究極的なものではない。我々人間が特定の具体的な信念を絶対化し、そこから離れまいとすることは、逆に一者に対して心を閉ざすことだとも言えるだろう (cf. 岡野 2010)。プロティノスの一者は、むしろ人間があらゆる具体相の絶対化から離れられる足場——そこには限定された内容は何もないので、むしろ足場のない足場と言うべきかもしれないが——としての意義をもつものである。我々はここにおいて、すべてを安心して手放すことができるのであり、いつもそこから一者の外的・派生的活動にあずかり、新たな力を得て生きることができるのである。

注

- 1 魂の構造については、岡野2008, pp. 135-136, 注21を参照。
- 2 ちょうど黄金が土塵にまみれていても、その土塵を拭い取ると黄金が後に残るように、魂の場合も「自分があまりに深く交わっている肉体のために

持っている欲望から離れ、自分のみとなり、その他の諸情念からも自由となり、肉体に宿って持つようになっているものから浄化され、自己のみとなって留まるとき、他のものに由来する一切の醜さを捨て去るのである」(I 6[1]5.54-57)。

- 3 プロティノスにあったこうした姿勢は、後にキリスト教神学と結びついて「否定神学」となる。
- 4 プラトン『ソクラテスの弁明』、『クリトン』を参照。
- 5 ソクラテスは自分の命の危険があっても、決して不正を為すことはなかった。たとえば、独裁政権の不正な命令には従わなかったという、次のようなエピソードがある。紀元前404年のペロポネソス戦争敗戦後、スパルタの支援を受けた30人の寡頭主義者が権力を奪取し、民主派の有力者や富裕者を弾圧し粛清するという恐怖政治を行った。彼等は多くの市民を自分たちの罪に荷担させる意図もあって、ソクラテスと他の4人にサラミスのレオンを死刑にすべく、連行してくるように命じた。このとき、ソクラテスだけはその命令に従わなかったが、もしこの政権がすぐに打倒されていなければ、ソクラテスは命を失っていただろうという危険な状況だった。

またペロポネソス戦争の末期、前406年に民主制のアテナイでも次のような事件があった。アテナイ軍はアルギヌサイ島沖での海戦で勝利を取めたものの、嵐に見舞われて味方の漂流者や遺体などを収容できずに帰還した。そのことに憤激したアテナイ人たちは、帰国した将軍たちに対して違法な仕方での裁判を行ったが、ソクラテス一人だけはそれに反対した。このとき、人々がソクラテスに怒り、彼を告発し逮捕せよとの怒号で議場が騒然となったが、彼は拘禁や死を恐れて不正な議決に賛成するようなことはなかった(プラトン『ソクラテスの弁明』 32a9-e1を参照)。

- 6 プロティノスはプラトン『ピレボス』 63b7-8の表現を引用し、一者は「自己だけで孤立している」(V 5[32]13.6, V 3[49]10.17, VI 7[38]25.15) と言っている。
- 7 「他のすべてを捨て去り、ただこのものの内にのみ立ち止まり、我々が身に纏っている他のすべてのものを断ち切って、ただこのものとならなければならぬ」(VI 9[9]9.50-52; cf. V 3[49]9.3-8)。

「我々はもはや激しい憧憬の念を惹き起こすものが、直知される形(形相)さえもすっかり離脱しているのを怪しむはしないだろう。というのは魂にしても、かのものへの強い愛を抱いたときには、自分もつあらゆる形を、たとえ自己自身の内にある直知される形(形相)であろうと棄て去るからである。なぜなら、何か他のものを持ち、それ

に関する活動をしている者は、(かのものを) 観ることも (かのものに) 調和することもできないからである。否、魂が自己のみの者となって自己のみの者を受け入れるには、悪いものであれ、善いものであれ、他のいかなるものも手元にもっててはならないのである。

そして魂が幸運にもかのものにめぐり合い、かのものが魂のもとへとやってくる、あるいはむしろかのものはいつも臨在していて、それが顕わになると言うべきだが、そのとき、次のようなことが生じる。つまり、それは魂が自分の手元にあるものたちを避けて、できるだけ美しくなるよう身を整え、(かのものと) 似たものとなるときなのだ——その準備と美装がどのようなものであるかは、身を整える者にとってはおそらく明らかである——魂は自己の内に (かのものが) 忽然と現われるのを観る。なぜなら両者の間には何もなく、もはや二つのものではなく、両者は一つだからである」(VI7[38] 34.1-14)。

- 8 知性(ヌース)との合一の場合も、我々は「自己に属する他のものを捨て去り、これ(知性)によって、これ(知性)を見る」(V3[49]4.28-29)。「見る」「観照する」という用語は、見るものと見られるものという二重性を意味し得るという点で、自己直知を本性とする知性との合一の場合は問題ないが、一者との合一を示す適切な表現とは言えない(VI9[9]10.11-15, 11.22-23)。
- 9 「これが魂にとって始めであり、終わりである (cf. プラトン『法律』IV.715e8)。始めというのは、魂がそこからやって来ているからであり、終わりというのは、善なる者がかしこにあるからである。そして、魂はかしこに至ることにより、自己自身となり、自己が本来あったものになるのである」(VI9[9]9.20-22)。
- 10 一者自身は「静」と「動」といった対立を超え、知性界の「第一の類」(cf. VI2[43]7-8)としてのそれらを超えている (cf. VI9[9]3.42)。
- 11 「そのとき魂は、他のときには喜んで受け入れていた直知活動さえも軽蔑する気分になる。というのは、直知することはある種の動きであるが、魂はもはや動くことを欲しないからである。なぜなら、魂が言うには、自分が見ているかの者も動かないからである」(VI7[38]35.1-4)。
- 12 「思考作用(ディアノイア)が、もし何か言おうとするなら、次々と異なるものを取り上げていかなければならない」(V3[49]17.23-24)。
- 13 久松真一が、プロティノスの哲学的思弁を「体験を反省しつつ辿り行く思索」(『久松真一著作集』第一巻, 1928年, p. 298) と述べているのはこのこと

である。久松がここで「反省」という言葉で述べていることは、プロティノスが「振り返って見る」という表現で述べたことと同義である。久松が指摘しているとおり、一者は「意識以前、言説以前の場」であり、言説は一者が「自分自身を意識するところにその源を発する」(ibid. pp. 295-96)。「自分自身を意識する」というのが「反省」ということであり、またプロティノスの「自己を振り返って見る」ということである。久松によれば、「彼は論弁、思索によって『太一』を論結したのではなくして、まず『太一』を宗教的に頓悟して、それを反省し、それと認識、道徳、芸術などとの関係を明らかにしたのである。この関係を明らかにする場合に、彼は純粹に哲学的と思われるような方法を用いている場合もある」(ibid. p. 297)。久松は彼のプロティノス理解は禅意識の「触入」によるものだと述べているが、西洋古典学的な仕方プロティノスの著作を紐解いても、同じ結論になる。一者と合一している間、人は考えることも語ることもしない。プロティノスは一者を体験した後で、その状態を振り返って見ること(これは体験者が一体化しているところの一者自身が、自己自身を振り返って見るということでもある)により、一者を根源的原理とする哲学を語った。

なお、これはイスラム神秘主義哲学について井筒俊彦が指摘していることとも一致している。「道の奥義をきわめた神秘家は、あとから反省しましてこの領域について思索し、この領域について語ることはできますが、この領域そのもののなかから思索しだすことはできません。すなわちここはコギトのはたらく場所ではなくて、むしろコギトの消滅する場所であります」(井筒 1980, p. 119)。「ですから下降の道をとってだんだん降りてくる、つまり人間意識がしだいに戻ってくる、ここではじめて神秘主義的主体は哲学しはじめることができるのであります」(ibid. p. 118)。

- 14 Hadot (1980, p. 259) はプロティノスにおける魂の中心的部分とされる言語、表象、記憶を伴った論理的 (rationnelle, discursive) 部分の意識が、神秘体験 (la présence irréflectie) に対して果たす反省的役割を論じ、それが捉えようとする内容を言語や表象に翻訳しつつ対象化し外在化するものであることを指摘している。

また、Schroeder (1985, p. 80 及び 1996, p. 350) の指摘によれば、一者についての言語的表現は、我々が自己自身の一者体験を反省したものである。彼は1996年の論文の中で、次のように述べている。「自己が所有するものを常に表現しようと欲し、そのためにその所有と直観とから自己を引き離すと

- いう魂の休みなさは、プロティノスの世界の他ならぬ構造に属している。[...] このようにして、魂は一者との合一の際にさえ、その一体化を告げるのである。V3[49]14.18-19から知られるように、魂はそうすることにおいて、言語を与える一者の、熟考し陳述する道具となる」(Schroeder 1996, p. 350)。彼が言及しているV3[49]14.18-19によれば、一者は言語だけでなく、直知の与え手でもある。一者と反省的観照における一者の表現については、Okano 2007, pp. 93-114; 岡野 2008, pp.151-187で詳しく論じた。
- 15 心の中のロゴスと発言されたロゴスという区別はストア派に由来する (SVF II 135)。
- 16 プロティノスによれば、ちょうど火に自己を火としてあらしめる熱と、そこから発する熱とがあるように (cf. V4[7]2.30-33; V3[49]7.23-25)、すべてのものにその実体を構成する活動 (内的・実体的活動) と、その実体から派生的に生ずる活動 (外的・派生的活動) とがある (V4[7]2.27-30; II9[33]8.22-23; IV5[29]7.13-18)。外的・派生的活動は、内的・実体的活動が外に顕現したものである。一者は自己自身のいわば内的活動 (超直知的で前認識的なある種の自己直観; cf. VI8[39]16.32; V4[7]2.16; VI9[9]9.58; 10.9-10; 11.43) の内に留まるままで、自然、必然的に外的活動を発するのであり、この外的活動が知性 (ヌース) となる。そこで、知性は一者の派生的・外的活動だとされる (V4[7]2.33-37; V3[49]12.39-41)。つまり、一者の外的活動である知性は、一者がいわば顕現したものである。同様に、魂は知性の派生的・外的活動である。「ちょうど知性がかの (一者) の言論的表現 (ロゴス) で、ある種の活動 (一者の外的活動) であるように、魂は知性の言論的表現で、ある種の活動 (知性の外的活動) である」(V1[10]6.44-45)。Cf. Okano 2005, pp. 161-164; 岡野 2008, pp. 102-108; 岡野2020, pp. 25-28。
- 17 V1[10]7.5-6 のパッセージの解釈については、Okano 2005 及び岡野 2008, pp. 91-120 で詳述した。
- 18 V3[49]11.1-16; VI7[38]17.11-34; 岡野 2008, pp. 74-81 を参照。
- 19 「魂そのものは視力のようなもので、魂の見る対象は知性でなければならず、魂は (知性を) 見るまでは無限定なものであるが、知性を直知するように生まれついでるのでなければならぬ」(III9[13]5.1-3)。「これ (感性界の質料) より前に生み出されたすべてのものは、無形のものとして生み出されたが、生んだ者へと振り返ることにより、いわばそれに養育されるようにして形相化されたのである」(III4[15]1.8-10)。知性からの魂の生成については、岡野2008, pp. 128-134を参照。
- 20 注16を参照。
- 21 プロティノスの論攷「永遠と時間について」(III7[45]) に基づく詳しい論証については、岡野2020, pp. 79-99を参照されたい。
- 22 「それ (魂) は自己の先にあるもの (知性) に向かって見ながら (これを) 直知する一方で、自己自身へと向かって見ながら自己の後にあるものを秩序づけ、管理し、これを支配する」(IV8[6]3.25-27)。魂は、その内的活動において知性を直知することにより自己自身を形成するが、その外的活動においては自己自身の形相を観るという反省的な自己意識によって下位のものを形成し、秩序付け、管理する。
- 23 注16を参照。
- 24 プロティノスは一者からの万有の生成を太陽から発する光や泉から流れ出る川に喩えている (e.g. VI9[9]9.3-7; III8[30]10.6-7)。そのため、この生成論は哲学史上「発出論」、または「流出論」と呼ばれている。ただし、本文で述べたように、プロティノスが非物質的な原理を説明する際に用いる物質的な比喩をそのままに思い浮かべて、物質的に解釈すべきではない。
- 25 感性界全体の時間、空間を生み出しているのは、宇宙靈魂である。一般に魂の働きは順を追って対象を捉えるものであり、あるものの次に別のものを捉えることにより、時間的・空間的な広がりが生じる。
宇宙靈魂の「推論的」で「逐次的」な意識活動という奇妙に聞こえるかもしれないが、宇宙靈魂も我々人間の魂も、同じ様に逐次的に展開する論理的な理を有している。この宇宙の法則性も、それを見出す人間の理性も、プロティノスの体系では、同じ「魂」という原理に基づくもので、知性界の全一的な魂の、主観・客観両方面への展開とみなすことができるものだと言えよう。岡野2020, pp. 258-259を参照。
- 26 プラトンは「太陽の比喩」において、「善のイデア」を存在と認識の原因だとしている (プラトン『国家』第6巻, 509b6-8)。

文献

・底本

Henry, P., et Schwyzler, H.-R., *Plotini opera*. 3 vol., Museum Lessianum, series philosophica 33-35, Paris: Desclée de Brouwer, Bruxelles: L'Édition Universelle, Leiden: E. J. Brill (editio maior), 1951-1973.

・レキシコン

Sleeman J.H.; Plollet G., *Lexicon plotinianum* (Ancient and

medieval philosophy, De Wulf-Mansion Centre, series 1, II). Leiden: Brill, Leuven: University Press, 1980.

・その他の著作

『増補 久松真一著作集』, 全9巻, 別巻, 京都: 法蔵館, 1994-1996年.

井筒俊彦 (1980). 『イスラーム哲学の原像』, 東京: 岩波新書.

『西田幾多郎全集』 竹田篤司, クラウス・リーゼンフーパー, 小坂国継, 藤田正勝編, 全24巻, 東京: 岩波書店, 2002-2009年.

Platonis Opera, ed. J. Burnet, 5 vols. Scriptorum classicorum Bibliotheca Oxoniensis, 1900-1907.

Stoicorum Veterum Fragmenta, ed. I. ab Arnim, 4 vols. Leipzig; Teubner, 1903-1924. Edition stereotypa editionis primae, Stuttgart; Teubner, 1964.

・研究書

Hadot, P. (1980). "Les niveaux de conscience dans les états mystiques selon Plotin", *Journal de psychologie* 77. 243-266.

Okano, R. (2005). "How does the One generate Intellect? Plotinus, *Ennead* V.1[10]7.5-6", *Ancient Philosophy* 25. 155-171.

— (2007). "Philosophical grounds for mystical intuition in Plotinus", *Dionysius* 25. 93-114.

岡野利津子 (2008). 『プロティノスの認識論: 一なるものからの分化・展開』, 東京: 知泉書館.

— (2010). 「宗教多元主義とプロティノス」 学習院大学人文科学研究所編『人文』第8号, 21-42.

— (2020). 『プロティノスと西田: 西洋的神秘と東洋的日常の根底』, 学習院大学研究叢書42, 東京: 学習院大学.

Schroeder, F. M. (1996). "Plotinus and Language", in L. P. Gerson ed. *The Cambridge Companion to Plotinus*, Cambridge, New York (N.Y.): Cambridge University Press, 336-355.

抄録

プロティノス (205-270年) によれば、「一者と合一」するにはまず知性界の意識に目覚めることが必要であり、それには感性界における欲や情念からの「浄化」や、

「問答法」による知性界における意識の深化が求められる。しかし、そのようにして直知される真実在は複数性をもち、万有の究極的な始原ではないということになる。始原を探求する者は、知性界の真実在についての真理といえども手放さざるを得なくなるが、そのようにして完全な自己放下がなされるとき、一者との合一が起こる。一者そのものは認識も言語も超えたものだが、一者との合一に至った者は自己のその状態を振り返って見ることにより、一者が諸存在にとっていかなるものであるかを直知することができる。これは、一者自身が自己を振り返って見て知性を生み出す働きに即した働きだと言える。また、直知された内容は、逐次的な思惟や身体的な感覚によって捉え直されることにより論理的に説明され、言語化される。

キーワード: 浄化、ロゴス、一者との合一、神秘体験の言語化、一者からの分化

Abstract

According to Plotinus (205-270), to attain to "the union with the One", one must first awaken to the consciousness of the intelligible world through "purification" from the desires and emotions of the sensible world. "Dialectic" is also important for deepening the awareness of the intelligible world. However, the true beings of the intelligible world have pluralities, so, those who seek the ultimate origin of all beings must let go even of the truth of the intelligible world. When one throws himself completely in this way, one attains to the union with the One. The One is beyond cognition and language, but one who is united with the One can directly know what the One is to other beings by reflecting on his own state of being one with the One. It can be said that this is an activity that is consistent with the activity of the One that generates intellect by reflecting on oneself. In addition, what is directly known in this way is logically explained and expressed in words by being reinterpreted by discursive thinking and physical sense.

Keywords: Purification, Logos, Union with the One, Verbalization of mystical experience, Differentiation from the One